

非常時、人はいかに行動すべきか : 「君子」を読み 解きながら

荒木, 雪葉

<https://doi.org/10.15017/1397852>

出版情報 : 地域健康文化学論輯. 4, pp.19-25, 2011-03-31. 地域健康文化学会
バージョン :
権利関係 :

非常時、人はいかに行動すべきか

—「君子」を読み解きながら—

荒木 雪葉

はじめに

この論文は、立派な人物としての「君子」においては、特に非常事態に陥ったときにいかに行動すべきかについて、『論語』を参考にして考察するものである。もちろん「君子」とは完全な理想像を前提した概念であるから、我々のすべてが非常事態において「君子」のように対応できていないことが前提である。それを踏まえた上で孔子は理想像を目標として掲げることで、我々すべてがそれを目指して修養を重ね、非常時を乗り切ることを期待するのである。このような孔子の知恵を参考にして、非常事態に対する手掛かりの一端を考えたい。

さて、そもそも君子とはいかなる存在だろうか。現代では「立派な人物」という意味で用いられる。しかし『詩経』など古典では「身分の高い人」「政治にたずさわる人」という意味で用いられていた。「君子」の意味が「身分の高い人」「政治にたずさわる人」から「立派な人物」へと変化していく過程にあったのが『論語』である。『論語』においては「君子」が「身分の高い人」「政治にたずさわる人」というだけでなく「徳の高い人物」、さらには「当世風のきらびやかな人」という意味で用いられていた。これは「君子」概念の揺らぎを意味し、孔子の時代が社会秩序の崩壊と再構築の過程にあったことは、筆者の博士論文『『論語』における孔子の教育思想と楽』¹において指摘したとおりである。

すなわち、孔子の時代は志を持って修養を重ねる人すべてが「君子」と呼ばれうる時代であった。「君子」という語はもはや為政者を指すのみではなく、全ての人が対象となり得るのである。本稿でも、君子という語を「立派な人物」、また「立派な人物を志して修養する我々」という広い意味で用いる。

さて、かような「立派な人物」としての君子概念が出現してきた『論語』の中に於いて、非常事態における君子はいかなる行動をするべきと説かれているのだろうか。『論語』には、君子とはなにか、いかにあるべきかということを示した語は多く存在する。その中でも、特に非常時での態度について述べたものには二章が数えられる。

子曰、富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是、巔沛必於是。
(『論語』里仁第四)

ここに登場する君子は、まさに孔子の教育の目指す人格である。君子と小人との違いは、もちろん平常時にも様々な違いはあるのだが、非常時にこそ現れる。非常時における君子に関するもう一章は、次のようなものである。

¹ 西南学院大学 博(甲)第9号、平成21年3月19日

在陳絶糧。從者病莫能興。子路愠見曰、君子亦有窮乎。子曰、君子固窮。小人窮、斯濫矣。（『論語』衛靈公第十五）

孔子が諸国を遊歴したとき、陳と蔡の間で包囲されたことがあった。そのとき食料がなくなり、従っていた弟子たちは疲れて立つこともできなかった²。『史記』孔子世家によると、孔子はこのようなときにも詩書を講誦し、弦歌して、少しも衰えなかったという。子路が怒って、孔子に「君子もまた窮すること有るか」と尋ねると、孔子は上のように答えたのである。

このうち、第一章では前者について詳細に解釈を行い、危急の際にとるべき行動について明らかにしたい。

第一章 非常時にも仁を離れない

子曰、富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是、巔沛必於是。（『論語』里仁第四）

子のたまわく、富と貴きとは、これ人の欲する所なり。その道を以てせずしてこれを得れば、處らざるなり。貧しきと賤しきとは、これ人の悪む所なり。その道を以てせずしてこれを得れば、去らざるなり。君子仁を去りて、悪《いず》くにか名を爲さん。君子は食を終うるの間も仁に違わず。造次にも必ずここに於いてし、巔沛にも必ずここに於いてす。

まずはこの章について、いかなる解釈を行えばよいか検討する。

- ・ 「子曰、富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。」について

この章の「富與貴、是人之所欲也」という部分について、何晏は孔安国の言を引いて「その道を以てせずして富貴を得れば、則ち仁者は處らざるなり。」³という。また「貧與賤、是人之所惡也」のくだりについては、「時に泰から否ること有り、故に君子 道を履みて貧賤に反る。これ則ちその道を以てせずしてこれを得る者なり。これ人の悪む所と雖も、違ふべからずしてこれを去るなり。」⁴という。『論語』ではこのあとに「君子仁を去りて、悪《いず》くにか名を爲さん。」と続くことを考えると、すなわち富貴を得るのに「その道を以てせず」とは、仁から離れて富貴を得ることを言い、貧賤を得るのに「その道を以てせず」とは、違ふべからざる仁から離れたために貧賤を得ることだとする。だから敢えて貧賤の状況から抜け出そうとしないという解釈である。

² 『莊子』山木篇によると、孔子と弟子たちは七日間ものあいだ「火食」すなわち火を通した物を食べることができなかったという。

³ 皇侃／疏『論語集解義疏（上）』（廣文書局、中華民國五七／六六年）p.116

⁴ 上掲書、p.116～p.117

皇侃は、「富與貴、是人之所欲也」については何晏と同じ方向の解釈を行うが、「貧與賤、是人之所惡也」については異なる。皇侃は「今もし有道にして、身反《かえ》りて貧賤なるは、これこれその道を以てせずして得るなり。わが道に非ずと雖もこの貧賤を招き、しかもまたこれに安んず、僉《みな》我が正道を除き去るべからずしてさらに理にあらずしてこれを邀うるがごとし、ゆえに去らずと云うなり。」⁵という。すなわち自分は有道であっても貧賤を得たならば、それは正当な方法でやってきた貧賤ではないため、あえて抜け出そうとはしないという解釈である。

朱子は『その道を以てせずしてこれを得』とは、まさに得るべからずしてこれを得るを謂う。然らば富貴に於いては則ち處らず、貧賤に於いては則ち去らず。君子の富貴に審らかにして貧賤に安んずることかくのごとし。」⁶と、富貴あるいは貧賤を得る主体が君子であることを前提に解釈する。すなわち、君子は貧賤を得てもそれは得るべくして得たのではないので、敢えて貧賤に安んずるといふ、皇侃とほぼ同じ解釈である。劉宝楠も「その道を以てせざるの富貴は則ち處らず、その道を以てせざるの貧賤は則ち去らざるがごときは、これ惟だ仁者のみこれを能くす。蓋し仁者の好悪は、内に節あり、故に富貴に於いては則ち審らかにこれに處り、貧賤に於いては則ち安んじてこれを守る。」⁷と、朱子と同じような解釈をする。

以上の解釈を鑑みると、「貧與賤、是人之所惡也」のくだりについては二種類の解釈が存在する。何晏のように「仁から離れたために貧賤を得る」という解釈と、皇侃や朱子、劉宝楠のように「君子が、不当に貧賤を得る」という解釈である。この両者のいずれが適当な解釈なのだろうか。

『論語』には、「貧しくして道を楽しむ」(学而第一)、「貧しくして怨むこと無きは難し」(憲問第十四)、「貧しきを患えずして安からざるを患う」(季氏第十六)と説かれている。つまり貧しさに安んじることは決して恥ではない。ただし、次のような場合には別である。

邦有道、貧且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也。(泰伯第八)

邦に道ありて、貧しく且つ賤しきは、恥なり。邦に道無くして、富みて且つ貴きは、恥なり。

国のあり方が道を得ているときに、貧しくかつ身分が低いのは、恥である。国のあり方が無道のときに、財産があり身分が高いのは、恥である。

国が有道のときに貧しく身分が低い、あるいは国が無道のときに財産があり身分が高いというのは、それは自らが道にかなっていないからである。『論語』では富貴あるいは貧困そのものを問題にするのではなく、あくまで自らが道に沿っているかどうかということの問題にする。また「貧與賤、是人之所惡也」のくだりは例えば「さらに修養を積んで貧賤から脱する」ことではなく、「その道を以てせずしてこれを得れば、去らざるなり」と、貧賤に安んずるといふことが説かれている。だとすれば、「その道を得ずして」というのは「自らは正しい道を歩んでいるにも関わらず、正当ではない方法で貧賤を得てしまった」と解釈するのが良いのではないだろうか。

⁵ 上掲書、p.118

⁶ 簡野道明『補註 論語集注』(明治書院、大正一一／平成二〇年) p.37

⁷ 劉宝楠『論語正義 上』(中華書局、1990／1998年) p.142

・ 「君子去仁、惡乎成名」について

この部分は「君子」の解釈がポイントである。「君子」を有徳者と解釈すると、有徳者が仁を離れるということになるので、おかしいことになる。では「君子」を貴族階級の人と訳すと、孔子門下の教育は貴族階級のみ限定されたものではなかったもので、やはりおかしいことになる。ここは、宮崎市定氏が『論語の新しい読み方』にて指摘されているように、『諸君』という呼びかけの意⁸で解釈するのはどうだろうか。つまり、「君たちは仁から離れたら、いったいどこで名を成すというのか」という解釈である。

・ 「君子無終食之間違仁。造次必於是、巔沛必於是。」について

この部分における「君子」は、「立派な人物」「君たち」のどちらでも解釈できるのではないだろうか。「終食之間」とは、食事を一度する短い時間ということである。

また何晏が引くところの馬融の説によれば、造次とは「急遽なり」、巔沛とは「僵仆《きょうふ》なり」という。急遽とはあわてること、僵仆とは倒れ伏すこと。つまり慌てふためくときにも、ぱったりと倒れそうなきときにも、仁から離れないというのである。

第一章では『論語』里仁篇の「子曰富與貴」章について詳しく考察した。これを要するに、君子は片時も仁を離れないということが説かれているのであるが、このことを説くきっかけとして「正当でない方法で得た富貴には、身を置かない。正当でない方法でこむった貧賤は、去らない（安んじる）。」と説き起こしていることが特徴的である。

危急の際、人はどうしてもわが身の安全を一番に考え、安全を守るためには他者のことを思いやる気持ちをおろそかにしがちなのではないだろうか。しかし、仁から離れて安住の場所を得ても、そこは本当の安住の場所ではない。「不義にして富み且つ貴きは、我に於いては浮雲の如し。」（『論語』述而第七）というように、容易に去ってしまうものなのである。危急の際にも普段どおりに仁に違わないことが求められる。

第二章 小人の行いとは

第二章では「在陳絶糧」章について、特に「濫」とは何を指すのかということについて考察したい。

「在陳絶糧」章では君子と小人とが対比して書かれている。子路をたしなめるという状況からしても、この章における君子と小人との違いは身分の差ではなく、志を持って修養するか否かの違いであると考えて間違いなからう。

在陳絶糧。従者病莫能興。子路慍見曰、君子亦有窮乎。子曰、君子固窮。小人窮、斯濫矣。（『論語』衛霊公第十五）

陳に在りて糧を絶つ。従う者病み、能く興つもの莫し。子路 慍《いか》りて見えて曰わく、君子もまた窮すること有るか。子ののたまわく、君子、固《もと》より窮す。

⁸ 宮崎市定『論語の新しい読み方』（岩波現代文庫、2000年）p.9

小人窮すれば、ここに濫《みだ》る。

この章についても、詳細に解釈を行ってゆく。

・ 「君子固窮。」について

ここでポイントとなるのは、「固」の解釈である。何晏は「君子は固より亦た窮する時有り」といい、皇侃は「君子の人、固より窮すと言うは、亦た窮する時有るのみ」という⁹。一方、朱子は程子の言を「固窮とは、固く其の窮を守るなり」と紹介し、「亦た通ず」と評価している¹⁰。程子の解釈によれば、「固」は「もちろん」という意味ではなく「固く、しっかりと」という意味になる。程子と同じ意味で解釈しているのが劉宝楠である。劉宝楠は「『固窮』とは、窮して當に固く守るべきを言うなり」¹¹という。

さていずれの解釈を取るべきかということであるが、文脈を見てみると、「君子固窮」は子路が「君子もまた窮することあるか」と問うたのに対する答えなのである。とすれば、「固」を「固く守る」と解釈すると、孔子が子路の問いかけをはぐらかしたようになりはしないだろうか。やはりここは、「もちろん」と解釈するのが良いように思われる。

・ 「小人窮、斯濫矣。」について

君子ももちろん困窮する、という語の後に続く言葉がこれである。君子と対比させ、小人は困窮すると「濫」という状態になる、と言っている。では、「濫」とはどういうことなのだろうか。

何晏は「濫は、溢なり。」という。すなわち「あふれる」「杵をはみ出て勝手な振る舞いをする」という意味になろう。皇侃は「もし窮を守らずして濫溢を爲せば、則ちこれ小人なり、故に小人窮すればここに濫ると云う。」¹²といい、何晏と同じく「濫」を「濫溢」とする。朱子は「放溢」¹³とし、やはり勝手な振る舞いをするという解釈をする。劉宝楠は「小人窮すれば則ち徳を濫《みだ》す」¹⁴としており、他の解釈と大きな差は無いと考えてもよいと思われる。

つまり、「濫」は「人間としての道を逸脱して勝手な振る舞いをする」と解釈するのが良いのではないだろうか。

ここで明らかになったのが、困窮したときの小人の行いである。小人すなわち志を持って人格的成長を目指すことをしない人たちは、危急の際には勝手な振る舞いをするというのである。このことと、第一章にて明らかになった君子の振る舞いとを合わせて考えると、危急の際に人間として取るべき行動が明らかとなる。これについて、結論にてまとめたい。

結論 危急の時に心がけること

⁹ 『論語集解義疏（下）』 p.535

¹⁰ 『補註 論語集注』 p.185

¹¹ 『論語正義 下』 p.611

¹² 『論語集解義疏（下）』 p.535

¹³ 『補註 論語集注』 p.185

¹⁴ 『論語正義 下』 p.611

第一章では『論語』里仁篇の「子曰富與貴」章について考察し、君子は危急の際にも仁を離れない、すなわち自分のことのみを考えたりせず、他人を思いやることを忘れないという結論に至った。またたとえ仁を離れて自分が安んじることのできる場所を得たとしても、それは正当な方法で得た場所ではないため、安住することができないということも分かった。

第二章では、『論語』衛靈公篇の「在陳絶糧」章について考察した。君子ももちろん困窮することがある。しかし君子と小人が異なる点は、小人は困窮したら、人として守るべき枰を超えて好き勝手な振る舞いをするということであつた。

第一章と第二章で述べてきたことをまとめると、次のようになる。すなわち人として守るべき仁の心は、危急の際にも決して離れてはならないものである。また危急の際、取るに足らない人物は、人として守るべきものを手放し、好き勝手にふるまう。「子曰富與貴」章を引申して考えれば、「在陳絶糧」章にて言及される人として守るべきものとは仁をはじめとする徳であると考えてもよいのではないだろうか。

天変地異や人災によって社会が混乱している時こそ、他者を思いやるまごころ、思いやりの心を忘れてはならない。己のみの安全を確保したり、保身に走ったりすることなく、お互いに思いやりあうという人間としての最も基本的な心を持つことこそ、春秋時代という社会秩序が崩れていった時代に生きた孔子が主張したことであり、また『論語』における危機管理の基本なのである。

おわりに

本稿では、危急の時こそ仁の心、思いやりを忘れてはならないと論じた。しかしともすれば思いやりのみで行動せよという論調も出てきがちである。そこで想起するのが、「仁」という語への朱子の註である。

朱子は「仁は愛の理」と言っている。仁というのは偏愛でも盲愛でもなく、理性ある愛なのである。ただひたすらに好きだから、かわいそうだから、という感情のみによって思いやりを発現させるのではなく、状況を見据えた理性ある判断が求められる。ただし、このことこそ、最も難しいことであろう。時には冷酷だと思われるような判断を下さざるを得なくなる場面も想定される。しかし広く物事を把握し、全ての状況が良い方向へと向かうようにと志して努力し続けることこそ、重要なのではないだろうか。

非常事態と呼ばれる状況を作り出す原因には、天災・人災など様々なものが考えられる。本稿の主張したいことは、非常事態の責任を帰する場所を探すことではなく、起こったことに対処する方法を考えるうえで、思いやりの心と、様々な事象を見渡すことができる冷静な判断力とが必要だということである。

参考文献

- ・ 簡野道明『補註 論語集注』（明治書院、大正一一／平成二〇年）
- ・ 劉宝楠『論語正義 上』（中華書局、1990／1998年）

- ・ 皇侃／疏『論語集解義疏（上）』（廣文書局、中華民國五七／六六年）
- ・ 宮崎市定『論語の新しい読み方』（岩波現代文庫、2000年）

[What way we must take in case of emergency –reading the case of Junzi in the Analects of Confucius]

[ARAKI Yukiha／西南学院大学非常勤講師・西九州大学非常勤講師／比較文化・中国思想史]